

県人会担い手育成青年派遣事業

平成 30 年度 海外福岡県人会青年派遣プログラム報告書



公益財団法人福岡県国際交流センター

目次

	Page
事業概要	2
派遣団員名簿	3
派遣スケジュール	4
報告書	
扇菌 礼寧 (九州産業大学 1年)	5
安庭 希海 (中村学園大学 1年)	7
桑畑 圭佑 (九州大学 1年)	9
河野 慶太郎 (福岡教育大学 3年)	12
宮本 結衣 (福岡女学院大学 1年)	16
古川 拓馬 (九州大学 2年)	18
内布 智士 (福岡教育大学 3年)	21
木村 晃久 (九州大学 3年)	24
中園 康太郎 (西南学院大学 2年)	27
貞松 咲月 (九州大学 2年)	29
写真アルバム	35

事業概要

1 目的

福岡県出身者が移住した国（メキシコ）を訪問し、移住先で活躍している海外福岡県人などとの交流やフロンティアに挑んだ先人について学ぶ。また、現地の政治経済情勢やビジネス事情を理解することを通じて、国際感覚を身に付けると共に現地とのネットワークをつくる。

2 内容

- ・県人会員宅でのホームステイ、大学等への訪問を通じた現地の人との交流
- ・フロンティアに挑んだ先人や移住の歴史についての学習
- ・企業、政府機関訪問等を通じた社会情勢把握
- ・上記を通じた現地とのネットワークの構築

3 派遣先 メキシコ合衆国メキシコシティ及びグアナファト市

4 期 間 平成31年2月23日（土）～3月5日（火） 9泊11日

5 派遣人員 10名

6 応募資格

次のすべてに該当する者

- 派遣時において、原則として18歳以上30歳未満の者（高校在学中の者を除く）で、福岡県内に居住していること
- 在籍する団体（勤務先・学校）の理解と承諾が得られること（申込み時点で20歳未満の者は、保護者の同意も得られること）
- 国際交流に強い関心と問題意識を持ち、協調性に富み、団体生活に適応でき、派遣に十分耐え得ると認められること
- 心身ともに健康であり、事前説明会、事前研修会、帰国後報告会にすべて参加できること
- 派遣終了後、福岡県または（公財）福岡県国際交流センターが実施する福岡県人会の関連行事に積極的に参加が見込めると認められること
- 過去において、（公財）福岡県国際交流センターが実施する派遣事業に参加したことがないこと

7 主 催

（公財）福岡県国際交流センター

派遣団員名簿

	氏名	所属
団長	家守 由紀子	公益財団法人福岡県国際交流センター 事務局長
団員	扇菌 礼寧	九州産業大学 国際文化学部 国際文化学科 1年
	安庭 希海	中村学園大学 教育学部 児童幼児教育学科 1年
	桑畑 圭佑	九州大学 文学部 人文学科 1年
	河野 慶太郎	福岡教育大学 中等教育教員養成課程 3年
	宮本 結衣	福岡女学院大学 国際キャリア学部 国際キャリア学科 1年
	古川 拓馬	九州大学 経済学部 経済・経営学科 2年
	内布 智士	福岡教育大学 初等教育教員養成課程 3年
	木村 晃久	九州大学 工学部 地球環境工学科 3年
	中園 康太郎	西南学院大学 法学部 法律学科 2年
	貞松 咲月	九州大学 農学部 生物資源環境コース 2年
事務局	堀 美幸	公益財団法人福岡県国際交流センター 企画交流部

派遣スケジュール

平成31年2月23日（土）～3月5日（火） 9泊11日

	日程	時間	内容	宿泊
1	2/23（土）	朝 午後	福岡出発 メキシコ到着 オリエンテーション・県人会（会員及び子弟）、ホストファミリーとの交流会・歓迎会	県人会員宅 ホームステイ
2	2/24（日）	午前 午後	チャプルテペク公園内国立人類学博物館 国立歴史博物館見学 ガリバルディ広場	県人会員宅 ホームステイ
3	2/25（月）	午前 午後	ティオティワカンピラミッド見学 グアダルーペ寺院（バシリカ）見学 ソカロ（メキシコシティ中心）見学	県人会員宅 ホームステイ
4	2/26（火）	午前 午後	日墨会館日本語学校訪問 あかね移住民博物館訪問 日本大使館訪問	県人会員宅 ホームステイ
5	2/27（水）	午前 午後	国際交流基金メキシコ日本文化センター訪問 UNITEC 専門学校訪問（県人会会員職場） Century21 不動産事務所訪問（県人会会員職場）	県人会員宅 ホームステイ
6	2/28（木）	午前 午後	マツダ自動車工場訪問 グアナファト市内見学	ホテル
7	3/1（金）	午前 午後	グアナファト州大学訪問 かけはし日本メキシコ文化センター訪問	県人会員宅 ホームステイ
8	3/2（土）	終日	フリータイム	県人会員宅 ホームステイ
9	3/3（日）	午後	メキシコ福岡県人会との送別会	（夜、空港へ）
10	3/4（月）	夜中	メキシコ出発	機内
11	3/5（火）	午後	福岡空港到着	

私が感じたメキシコ



おうぎその あやね
扇 蘭 礼 寧

(九州産業大学 国際文化学部国際文化学科 1年)

目的：福岡をルーツにもつメキシコ在住の日系人との交流のため

私は、2月23日から3月5日まで福岡県を代表してメキシコへ行って参りました。この報告書では、メキシコにおける日系人との交流、メキシコでの活動、最後にメキシコを訪問して感じたことを述べたいと思います。

まず、メキシコにおける日系人との交流では、あかね記念館や日墨会館などを訪問しました。実際に、メキシコに移住された方のお話を聞くと、インターネットや本では計ることのできないくらいのインパクトを受けました。また、メキシコという日本から遠いところにあるにも関わらず、日系人というコミュニティをもち、ひな祭りやお盆など日本の行事も開催しているそうです。しかし、私たちを含めた多くの日本人は、おそらくこのようなことは知らないはずで、100年前に日本人がここまでして異国の地を開拓し、そして現代まで密接な関係である日本とメキシコのつながりを途絶えさせないために私たちが福岡、そして全国へ発信していくことが宿命なのではないかと思いました。また、あかね記念館や日墨会館以外にも、日本大使館やグアナファト州大学など、個人旅行では行けないようなところにも参加しました。普段行けないようなところに行くのは、好奇心が掻き立てられましたが、それと同時に自分の知らない世界を知ることができて、とても勉強になりました。特に、グアナファト州大学では、留学中の日本人に会うことができ、留学を考えている私にとって、とてもよい参考になりました。

最後に、メキシコを訪問した感想を述べたいと思います。これは、感想というよりも実感したことにあたるかもしれません。私は、世間体を気にして自分の意見や思ったことを言うことがなかなかできませんでした。そして、生活スタイルや食事も、日本と大きく異なるメキシコでは、自分の思ったことを言わざるを得ない状況になりました。しかし、どのようにして伝えたらいいのかわからない私は、どうしていいかわからず、不安な生活を送っていました。しかし、ある人との会話をきっかけに、もっと自分に素直になってもいい、もっと自分にわがままになってもいいということを教えてください、ホストファミリーに少しずつ自分の気持ちを伝えることができました。ここまで読んで、当たり前なことをなどと思っている方もいらっしゃると思いますが、世間体ばかり気にしていた私にとって、人に意見を伝えられるようになったのは、飛躍的に成長できた部分だと思います。今回、この福岡県人会青年派遣プログラムに私を選抜していただき、本当にありがとうございました。派遣中、私にアドバイスをくださった方は、受けた恩は私が違う形でほかの人に渡すように、とご教示してくださったので、日本に帰国してから私は、目標を掲げま

した。

それはメキシコ派遣を通してメキシコの魅力を伝えることです。メキシコへ行く前は、私を含め、多くの人々が危険な国だというステレオタイプに左右されていましたが、実際に訪問すると、危険な国どころか、日本にはない人の寛容さや陽気さなど、魅力あふれる国だと思いました。また、メキシコには歴史上、日本と深い関係があるにも関わらず、学校教育における歴史の教科書には一切記載していないのが現状です。表面的な歴史の勉強ではなく、「夏草や つわものどもが 夢の跡」(松尾芭蕉)のような歴史を学ぶ必要があると思います。このプログラムを通して一つの歴史に対して、多角的に見ることができました。歴史を風化される過去にするのではなく、過去の歴史や先人から得られることを読み取ることが歴史を学ぶ本来の意義なのではないかと考えました。私が、その受け継ぎができるかはわかりません。しかし SNS や課外活動を通しての取り組みの中で、できる限り発信したいと思います。

最後に今回、このプログラムに参加させていただいて、感じたことが二つあります。一つ目は、直接的に学ぶことは間接的に学ぶことより得るものが大きい、ということです。メキシコへ派遣される前に、メキシコにおける日系人の歴史やスペイン語を勉強しましたが、現地へ行くと、事前に勉強したことよりも、現地で新たに得られた経験や知識の方のインパクトが大きく、直接学ぶことの重要さを痛感しました。

二つ目は、自分を表現することの大切さです。メキシコ派遣以前は、自分を表現せず、周りに流されていました。今回、メキシコへの派遣ということでメキシコ人に自分のことをどう思っているかを尋ねたところ、すべての人が自分のことが好きだと言ってくれました。今まで、自分自身を否定していた私にとってとても大きな刺激でした。

今回のプログラムは、10日間の短い期間でしたが、多くの日系人と交流することができました。しかし、多くの日本人は、メキシコで日本人が活躍していることは知らないかと思います。そこで、私たちが、福岡をはじめ、日本全国に広めていくことは、日本とメキシコの架け橋になると思うので、多くの人に発信したいと思います。

海外福岡県人会

福岡県からの海外移住は 1885 年のハワイ移住に始まり、北米・中南米を中心に広がりました。移住した人々は、異国の地でお互いに助け合いながら生きていくために「海外福岡県人会」(以下、県人会という)を設立し、現在、移住者やその子孫等で構成される県人会は、世界 9 カ国、20 ヶ所にあります。

平成 4 年から 3 年ごとに、世界各地の海外福岡県人会が一堂に集まり、県人会活動の情報共有や母県福岡との関係強化を目的として、海外福岡県人会世界大会が開催されています。次回は、2019 年 11 月に福岡県内で開催予定です。

私の新サムライ魂～挑戦と発信～



やすにわ のそみ
安庭 希海

(中村学園大学 教育学部児童幼児教育学科 1年)

今、この海外福岡県人会青年派遣プログラムに、参加させていただくにあたっての目標に近づけていると実感しています。目標は、現地の方々と交流し、自分の価値観や考えを広げ、人に伝えたい、と派遣前に掲げており、今後、人に伝えることを忘れずに生活を送ろうと考えています。私は、今回の交流で、たくさんの方々の生き方やぬくもりを知り、自分の価値観の狭さに気づかされました。そして、自分の将来を深く考えさせてもらったとも考えています。

私の夢は、以前、小学校の教師であったものの、現在は強くなりたいと願っているわけではありません。しかし、日本を含む世界の教育には興味があります。そんな私に、日本大使館を訪れた際には、日本の若者には「危機感」を抱いてほしい、というお言葉だったり、メキシコ福岡県人会の飯田さんには、自分の意識・努力次第で、人によって大きく違ってくるものだよ、と言われてたり、心に響くお言葉を頂き、考えさせられました。

また、日墨会館、日墨協会日本語学校、あかね記念館を訪問した際には、移民の歴史や日系人の活躍ぶりを知り、私もやりたいことを粘り強くやってみようという気持ちになりました。熊本地震を経験した時にも感じましたが、今、なんの不自由も感じることなく暮らしていることは、あたりまえのことではなく、今やりたいことをやらないと後悔するというのを改めて再確認できたと感じます。

そして、私の夢への目標として、今回のプログラムを通して考えたことは、語学を学び、世界の教育を理解することです。私の夢は、定まっていませんが、やりたいことから夢を切り開いていこう！と考えるようになりました。違和感のある学生生活から、このプログラムのおかげで抜け出せる気がします。

次に、世界幸福度ランキングの違いについてです。2018年3月14日、国連が「世界幸福度ランキング」を発表し、日本は、54位で、メキシコは24位でした。派遣前は、なにが違ってこのような2倍以上もの順位の違いがつかの、見当が付きませんでした。ホームステイをさせてもらい、少し理解できたのではないかと感じます。

その1点目は、家族（親戚も含む）がとても仲が良く、助け合っているからだと思います。日本でも、家族で支えあって生きてはいますが、ホームステイ先で思ったのは、よく抱き合ったり、よくおしゃべりしたり、じゃれあったり、友達のように家族みんなが、すごく仲が良かったです。日本人は、核家族化も進み、両親が多忙など、なかなか思っていることすべて家族に言うことが少ないのではないかと思います。自分の気持ちを素直に共有するという点で、素晴らしいなと思いました。そこで、ストレスが軽減しているのではないかと感じました。

次に、2点目は、すごくメキシコの方々は、陽気でフレンドリーです。朝、目覚めたら心地よい音楽が、外から聞こえてきて、朝から気持ちよく、支度や朝食をとることができました。そして朝食中、ふと、外の景色を見ると、ホームステイ先の目の前の公園では、バスケットボールをしている大人がいて、素晴らしい環境だなと感じました。このように大人でも公園で楽しんでいる環境に魅力を感じます。私自身、バスケットボールを今までさせてもらっているのも、この環境には、驚きましたし、憧れを抱きました。また、お買い物に歩いている時でも、多くの方が、ホストファミリーに話しかけていて、ホストファミリーがあまりにも仲良く話すので、友達なの？と聞くと、ちがうよ、と言われました。日本では、見知らぬ人とあそこまで笑顔で楽しく会話することはないと思うので、これがメキシコか！と衝撃を受けました。なので、日常生活の多くの面から、国民性が分かった気がします。

3つ目に、勉強にすごく熱心なところでは、県人会の方々、ホストファミリーの方々に関わって感じたのですが、日本語でこれはなんというの、という質問を幾度となく、されました。本当に学ぶ姿勢があり、勉強を苦と思わず、楽しんでいると感じました。ホストファミリーに聞いたところによると、勉強をできているのは、すべての国民ではないそうです。お金がなくて、勉強できない学生も多くいるそうです。そのような環境だからこそ、勉強を楽しむことができているのではないかと思います。日本の幸せが悪いとは言いませんが、幸せすぎて、勉強ができているありがたさが分からず、学校で勉強する意味が分からない子どもも多くいるのではないかと思います。私も、テスト前など、何度も勉強が嫌になりました。しかし、今回のプログラムを通して、様々な方々と関わって人生勉強し続けたほうが楽しいなと考えるようになりました。

最後に、これから、もっともっと学びを深めたいと思ったのは、移民の歴史についてです。今まで教育を受けてきた中で、移民について触れることはごく僅かだったため、移民についての知識がなく、本当に右も左もわからない状態でした。県人会の方々の交流や、日墨会館でのお話、『サムライたちのメキシコ』をいただけて、拝読できたため、移民された方々の粘り強さや底力に感激しました。また、文面ではわからないことまで、県人会の方々が教えてくれたので本当にためになりました。もっと、移民のことを勉強し、このことを発信していこうと思います。

今回、様々な経験をさせていただき、自分を見つめなおすよいきっかけになりました。カルチャーショックで戸惑うことも多くありましたが、家守さん、堀さん、県人会の方々ホームステイ先の家族、プログラムの仲間、バスガイドさん、現地の方々、本当に温かく包んでくださいました。素晴らしい機会を与えてくださり、感謝しています。このようなぬくもりを知ったことで、今自分にできることを精一杯やることの大切さを感じることができました。関わってくださった皆さん、本当にありがとうございました。

自分の目で見ることでの気づき

くわはた けいすけ
桑畑 圭佑

(九州大学 文学部人文学科1年)



はじめに

まずは、このプログラムに参加することができて本当によかったと思っています。自分にとってかけがえのない経験になり、様々なことを考えるきっかけにもなりました。

出発前

書類選考と面接を無事に通過し、今回のプログラムの派遣団として選ばれました。行くための準備や、提出書類をこなしながらも、私は期待と不安な気持ちだったと思います。海外に行ったことは何度かありましたが、初めて顔を合わせる人ばかりの中で10日間ほどを一緒に過ごすという経験は今までに無く、プログラム中のホームステイに関して人生初経験でした。日程スケジュールなどの配布や説明の中で、行程に関しては分かっている場面もありましたが、やはり行ってみないと分からないこと（ホームステイはどのような家庭なのか、危ない目に遭うか、仲間と上手くやれるかなど）ばかりでした。出発前に2、3回ほど皆と会う機会があり、そのときは名前と大学、学年ぐらいの情報でどのような人なのかは全く分からず、でも皆すごくいい人そうだな、プログラムを見つけて応募してきた人に悪い人はいないだろうなという印象を受けました。

体調だけには気をつけて無事に出発できることが大事だと思いました。その点に関しては、参加者全員が、皆そろって出発できたことが心の底からよかったと言えます。誰か一人でも欠けていたら、今回のメキシコ派遣での出会いや関わりが無くなってしまっていたので、そう考えるだけで、やるせない気持ちになります。このメンバーで行けてよかったです。

メキシコにて

初日、こんなに長い飛行機に乗るのは人生初で、物理的に人生で一番長い日でした。まだメンバーとは少しぎこちないやり取りだった気もしますが、半日を超えるフライトの中で仲良くなったように感じます。

メキシコに着陸する前から学ぶことはいくつかありました。飛行機の中から見えた北アメリカの大陸は地図よりも、もっと地図で現実でした。ただの何もない荒野だと言ってしまうまでも、普段の生活では見られないものであるし、実際に自分の目で見ることの大切さを感じました。メキシコに着いてからは、目に入るもの全てが初めてだったので、見たもの聞こえたもの全てにリアクションをとってしまった気がします。

歓迎会では、早速メキシコの食べ物をお口にすることがありました。パンに挟んであったモレは衝撃的でした。少し辛いのにチョコレートの味と匂いがする。このモレは、プログラムを通してあまり好きになれませんでした。歓迎会では、美味しい食べ物ももちろんありました。想像していたよりも辛くなかったです。

また、県人会の方との顔合わせもありました。ホームステイでお世話になる家庭の方とは、この時が顔を見るもの会うのも初めてだったので緊張はありましたが、印象よくいこうと考えました。

歓談の時間には、県人会の前会長、飯田さんと話す機会がありました。そこで聞いた言葉が、とても印象的で心に残っています。飯田さんは「〇カ国語を話せる人には〇人分の価値がある。」というようなことをおっしゃっていました。コミュニケーションをとるためには必ずしも言語である必要は無く、ジェスチャーや表情で伝えられることもあるかもしれません。しかし、言語はコミュニケーションのツールとしては非常に有用なもので、使えるか使えないかで意思疎通や表現の幅が決まると思います。飯田さんも移民としてメキシコに来てから「大変だったのは言語だ」という風にも言っていました。言語を使いこなせると言うことは、大きなアドバンテージになると思います。これからの時代、自動翻訳機も開発されるかもしれませんが、人間味のようなものが失われていくように感じられて少し悲しい気がします。修学旅行で行ったシンガポールで、次のような経験をしました。現地の学生と交流しながら案内してもらって一緒に観光するという内容の時間がありました。しかし、私の班の担当の現地学生はスマホでひたすらに翻訳をし続け、面と向かって話すこともなく、あまり楽しい思い出にはなりません。確かに、最低限の意思疎通はできましたが、人と人との交流という点に関しては、機械を介さずに自分の言葉でコミュニケーションをとれるというのは、非常に大事なことだと思いました。これからの言語学習における大きなモチベーションとして心に刻まれました。

ホームステイは初めてで、不安だったというのは前にも書きましたが、その不安もすぐに消えました。こんなに親切にしてもらって大丈夫なのだろうか、違う種類の不安が出てくるほどでした。メキシコの方々の心遣いは最終日まで続いて、その労力と姿勢には頭が上がりません。本当に感謝しかありません。

2日目に行った博物館は、日本の博物館と異なっているところも多く、展示の内容だけでない様々な部分が勉強になりました。例えば、学生が無料で利用することができる面や国民が優待されるという点です。また、教育の場としてのみの存在意義に留まらず、メキシコの人たちにとって憩いの場として機能しているようにも感じました。それは、年齢や性別を問わず、たくさんの人で溢れているという印象を受けたからかもしれません。私は、大学で学芸員の資格を取得しようかと考えていたところだったので、海外の博物館を見るのはとてもよい経験でした。人形のような模型も多かったので、説明文がスペイン語で分からなくても展示物だけで楽しめました。

実際に自分の目で見るのが大事だというのは、3日目のテオティワカンピラミッドで再認識しました。世界史の教科書で見たことのあるピラミッドは、写真で見るよりも伝わってくるものが多かったし、規模や写真に写り込んでいない周りの様子がよく分かり、自分がメキシコの気候の中にいるのもあってか、歴史にもっと寄り添い思いを馳せることができました。

どの訪問場所も行ってよかったと思えるものばかりですが、特に印象深かったのは日本大使館です。個人旅行では絶対に旅程に含まれないような場所で、本当に貴重な経験だっ

たと思います。そもそも大使館はどんな場所なのかということも教えてもらえたり、外交、他人と関わりを持っていくということはどういうことなのかを教わりました。今までは私の勝手なイメージで、大使館は率先して外交関係を築いていくものだと思っていました。もちろん業務上そういった場面も多いはずですが、民間の人々の外交の上に成り立っていることも多々ある、というのが私にとっては新しい考え方でした。たとえ民間人の一対一での交流に対しても、それを「外交」と呼んでいたのは新鮮でした。また、「国際」のような難しい言葉を使わなくても、隣の人に接するのと同じように、もっと身近に思っても良いのだということを知りました。

グアナファトは、美しい街でした。本当に美しい街でした。自分がメソアメリカにいたことを忘れてしまうくらいにヨーロッパ風の建物や町並みが目に入ってきましたが、植民地としての過去など歴史を学んだ後には、ただ美しい街だと捉えるのではなく、その裏側のことまで考える力が身についたように感じました。一つの物事の表面だけを撫でるのではなく、多くの角度から見直すことも大事なことだと思います。

フリータイムでもたくさんの場所に連れて行ってもらいました。果たして私は、ステイ先の家族のように自分の街を紹介、案内できるほどにきちんと知っているかなと自問しました。メキシコに限らないかもしれませんが、海外の人は自分の故郷のことについて、きちんと理解していることに感心させられます。

送別会では、また、メキシコの人たちからの愛を感じました。本当に派遣での全員との出会いに感謝しています。

プログラムを終えて

初めての国で、初めてのホームステイをして、言葉の壁や文化の壁を感じることは、当たり前ですがありました。しかし、「壁」のように否定的に考えるのではなく、ただ違いがあるというだけのことで、別に閉ざされているわけではないということに気づきました。

メキシコの方との交流ももちろん印象的な思い出ですが、一緒に過ごした日本の学生との出会いも、かけがえのないものです。一つの大学に通っているだけでは出会えない人と出会うこともできたり、同じ大学でも出会うことのなかった人とも出会うことができました。10日間という期間でもお互いのことを知り、雑談も深い話もできたことは、非常によい経験でした。

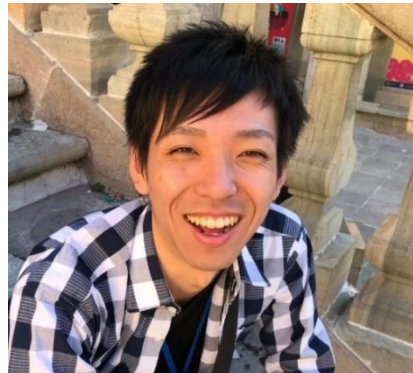
私は、この先何になりたいとかをまだ決めておらず、そのためにも、今のうちに多くのことを知っておきたいと思い、このプログラムに参加しました。分からないから知ろうとしても、知ったことで、もっと分からなくなることもあります。でも、それを繰り返し続けていくことが、「とりあえず」や「まずは」でもいいから、外（海外という意味に留まらず）に出てみるのが大事だなと思います。そして、今回のプログラムを通して、それは、間違いではなかったなと感じ自信にも繋がりました。

言葉にできない部分もありますが、本当にたくさんを知りました。そして、もっと勉強しようとも思われました。このプログラムに関わりを持つことができた全員や、陰でプログラムに携わっていただいた方々に感謝しています。本当に楽しいプログラムでした。

メキシコでの優しさに触れて

かわの けいたろう
河野 慶太郎

(福岡教育大学 中等教育教員養成課程 3年)



平成31年2月23日から3月5日まで、メキシコ福岡県人会へ派遣させていただいたので、下記の通りご報告いたします。

1. 訪問概要および所見

・県人会交流会

現地の料理や飲み物で食事をしながら、派遣プログラムメンバーの挨拶や博多どんたく踊りの披露、福岡県土産の贈呈などを行い、交流した。会長である平田さんをはじめとする福岡県人会の方に、温かく迎えていただいた。基本的には、日本語と簡単な英語とスペイン語で会話をしてくださり、また、日本語があまり得意でない県人会の方のために、私たちが日本語で話す挨拶をスペイン語に訳してくださった。英語もスペイン語も得意でない私は、もっと勉強してくればよかったと後悔し、たくさん親切にしてもらう度に申し訳なさを感じた。もし私が県人会として迎える立場なら、どうして話せないのに来たのかと疑問に思うだろう。しかし、私の気持ちとは裏腹に、県人会の方は嫌な顔一つせず、日本語で一生懸命コミュニケーションをとろうとして下さり、私たちのことや日本、福岡のことなどたくさん聞いてくれ、時には、熱く人生経験を語ってくれた。とても優しく、温かかった。地球の裏側で、見ず知らずの私たちのような学生に、とても親切にしてくれ、そして、日本や福岡のことを想ってくれる人がいることに感動した。はじめ、私は言語について負い目を感じていたが、福岡県人会の方の愛情にふれ、この福岡県人会の方に少しでも何かを返したいと思うようになった。今の自分にできることを考え、日本語でもいいから沢山質問をすること、笑顔で話したり、聞いたりすることを心掛けた。人の優しさで、人は動かされることがあるのだと、とても大事なことを教えてもらった。

・国立人類学博物館・チャプルテペク城・テオティワカンピラミッド・グアダループ寺院

鯨江ガイドのもと、メキシコの歴史を学習した。博物館やチャプルテペク城には、現地の方が、日本の比にはならないほど多く訪れていた。博物館は、日曜日には国民が無料で入場することができ、13歳以下、60歳以上の国民や、メキシコの学校に通う学生・先生・教授は、常に無料で入場できる。教育活動の役割を担う博物館が、社会に開かれているのは大事なことだなと思った。

見学が終わり、ホームステイ先の方とメキシコの歴史について話す機会があった。メキシコがどのようにしてできたのか、もともとどのような土地だったのかなど、博

物館でガイドしてもらったときと似たような話をしてくれた。日本人は、自分の国の歴史を話せるだろうか。自分の生まれ育った国について、関心がなかったことについて、恥ずかしく感じた。海外に目を向けることも大事だが、日本の歴史や文化も大事にしたいと感じた。

鯉江ガイドともお話しでき、どのような経緯によってメキシコで働き、なぜメキシコの文化について深く理解しているのかなど、現地の歴史を深く知り、現地で働く日本人の方の意見が聞けた。一つひとつ丁寧に説明してくれる穏やかな鯉江ガイドが、「行動してきたから」と力強く自分のことを語っていたことが印象に残っている。

・日墨会館・日墨協会日本語学校・あかね記念館・日本大使館

日墨会館には、日本庭園や桜の木、お寺に似た構造の建物など日本を感じることができる空間が、メキシコにあることに驚いた。

日墨協会日本語学校を訪れ、県人会の方から移民についての講話を聞いた。メキシコの日系人の話もあったが、世界中にいる日系人についての話に重点が置かれた。メキシコの移民の話をもっと深く聞きたかったが、移民について考えるときは、もっと大きな視点から捉えることも大事であると教えてもらった。講話を聴きながら、日系人の方は日本のこともメキシコのことも大事にしているように感じた。日本に住んでいて、中々考えることはないが、日本人のアイデンティティを客観的に捉えて、大事にしたいと感じた。

あかね記念館は、日系2世3世…の人たちに、移民してきた先祖の頑張りや後世に伝え、残すために造られた建物であった。館長の方が、日系人の若い子たちは、移民の大変さを忘れていて、軽視しがちになっているとおっしゃっていた。そのような思いで記念館が造られているのを聞き、初めて知らないことへの危機感を感じた。「花のことは考えても、根っこのことを想う人は少ない」という言葉を戒めにして、まずは知っていききたい。

日本大使館を訪れ、仕事の内容やメキシコの国のことについて話していただいたあと、質疑応答の時間があった。外交について、次のように説明して下さった。外交は難しいものではなく、隣の村に困っている人がいたら助けに行くようなもので、各個人でできるレベルの外交があり、そのレベルの違いに、良い悪いというレベルはない。そして、「海外から日本を客観的にみることがあると思うが、なにか日本人に要求することがあるか」という質問に対して、「危機感を持ってほしい。安定して安全な生活が送れていることを、当たり前だと思って勘違いしている。甘えすぎている。そういった生活を守り、続けていくためには、更新していかなければならない。何ができるのか、何をやるのかを考えてやりつづけなければならない。危機感を持つためにも、外に出てほしい」と答えて下さった。簡単に答えが見つからないが、常に自分に問い直しながら過ごしていかななくてはならない。

・国際交流基金メキシコ日本文化センター・UNITEC 専門学校・Century21 不動産事務所

国際交流基金メキシコ日本文化センターでは、日本語教育の支援について話を聞いた。日本の企業がメキシコに進出し、そこで働くメキシコ人や、メキシコで働く日本人労働者の子どもが増え、日本語に対するニーズが高まっている。その中で、日本語

の教師が不足している現状があるため、メキシコ人の日本語教師を育成する取り組みに力を入れていた。日本で教師を目指していたが、日本語教師という他の選択肢があることを知り、他にも選択肢があるのではないかと視野が広がった。自分自身がどのような教育をしたいか理想を持ち、それを求めて仕事を探すのも大事かもしれない。

福岡県人会の方の職場である UNITEC 専門学校と Century21 不動産事務所を訪問した。UNITEC 専門学校は、歯科やりハビリ、管理栄養士などの専門学校で、日本でもなかなか見学できない場所であり、Century21 不動産事務所もメキシコの方が働いている普段の姿を見ることができ、貴重な経験となった。UNITEC 専門学校を紹介してくれた方は、日系人の奥さんで、メキシコ人であるが、日本語で案内してくれた。日本語をまだまだ上手になりたいとおっしゃっていて、何歳になっても向上心を持ち続けたいと思わせてくれた。Century21 不動産事務所では、スペイン語しか話せない方だったが、私たちに沢山話してくれ、その時は、福岡県の県費留学生在が通訳をしてくれた。通訳をしてもらい、より実感したが、話してくれる人の言葉で話を聞きたいと思った。通訳を挟むことで、伝えたいことは分かるかもしれないが、何かが抜け落ちているような感覚を感じたので、派遣プログラムが終了しても、言語の勉強は終わらせずに続けていきたい。

・マツダ自動車工場・サラマンカ市内見物

マツダ自動車工場では、工場の概要の説明、質疑応答や車の製造過程の見学を行った。ゼロから企業が進出していく難しさが印象に残った。どのような人材から雇用するのか、現地の人にどのように受け入れてもらえるか、どのような女性労働者への出産や育児のサポートをするか、現地の人にあった働き方の模索など、数多くの話を聞かせていただいた。企業を運営していくうえで、一方的な利益を求めめるのではなく、現地の人との相互理解を図り、共生していくことが大事であるのだと感じた。

・グアナファト州大学・かけはし日本メキシコ文化センター

グアナファト州大学では、スペイン語の授業を見学した。日本から留学した大学生の人もいて、話を聞くことができた。文化を知るには、言語を知ることが大事で、言語を知るには、文化を知ることが大事だと言っていた。胸の中にあるもやもやしたものを言語化してくれ、すっと腑に落ちた。同年代で世界に目を向け、行動をしている人と会うと、とても刺激になった。

かけはし日本メキシコ文化センターでは、かけはしの概要の説明や、日本語を勉強しているメキシコの方と交流した。結婚を機に日本からメキシコに移り住み、家の一室で日本語を数人に教えたことからスタートしたという取り組みであり、今では規模を拡大し、様々な取り組みを行っていた。自分にできることを行動に移すことで、形になることを教えてもらった。自分はどのような行動を行うのか。

2. 目標に対して

派遣プログラムに参加するにあたり、「メキシコに学ぶ人権教育」という目標を立てた。現在の日本は、労働年齢人口の減少により、外国人労働者を雇う動きがみられる。外国人を受け入れる日本は、これまで以上に在日外国人との関り方を見直す必要がある。メキシコは、外国人である日本人を受け入れ、その日本人が国に貢献してい

る。そのため、メキシコ人が移住してきた日本人にどのようなことをしたのかを学ぶことは価値があり、人権教育という観点から具体的に学ぶためにこの目標とした。

あかね記念館の館長に、「メキシコの方は、どのように日本人を受け入れたのか、差別などの問題はあったのか」と質問した。「差別にあたり、いじめにあたりしたことはない。そのようなことを記した資料はなかった。」とお答えいただいた。また、記念館内にある農業をしている写真を見ても、メキシコの人と一緒に写っていた。日本人だけで努力して移住を成し遂げたわけではなく、共生したのだろうと推測する。実際にメキシコの人と交流することで、メキシコの人の優しさに触れることができた。メキシコの方は、今回の派遣プログラムのメンバーに優しくしてくれたように、移住してきた日本人を受け入れてくれたように思う。

外国人を受け入れる日本は、これまで以上に在日外国人との関り方を見直す必要があると先に述べたが、「愛情をもって共に生きていく」という姿勢が答えではないかと思う。愛情がなにかといわれれば、様々な形があると思うが、相手に優しくされたら、自分も優しくしてあげようという誰にでもある気持ちを大事にすることで、共に生きていくことができるのではないだろうか。国という括りは関係なしに。

教師になり、どのようにこのプログラムでの経験を子供たちに還元するかを考えた。それは、(仲間の言葉を借りるが)愛されることを教えること、愛することを教えることかなと思う。子どものためにという愛情を基本として接していきたい。そうすれば、愛情をもって共に生きていく人が増えるのではないかと思う。具体的に何をしていくかは、これから考えていく課題である。

3. 最後に

このような貴重な体験ができたのは、福岡県国際交流センター、福岡県人会の皆様
の支援があったからです。本当に感謝しております。

堀さんと家守さんには、迷惑をおかけしたかもしれませんが、私たちが安全に、楽しく、多くのことを経験できるように支援していただき、感謝しきれないです。本当にありがとうございました。

メキシコ福岡県人会 (Mexico Fukuoka Kenjinkai)

○創 立 1952年

○会 長 平田 フランシスコ (2011年3月就任)

○会 員 数 172名 (75世帯)

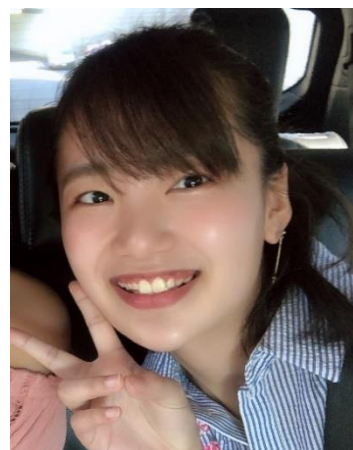
○所 在 地 メキシコ合衆国メキシコシティ

(2019年3月現在)

外に出て初めて気付く メキシコと日本のつながり

みやもと ゆい
宮本 結衣

(国際キャリア学部 国際キャリア学科1年)



私たちは、2019年2月23日から3月5日まで、海外福岡県人会青年派遣プログラムで、メキシコに派遣団員として滞在した。見るもの、触れるものすべてが新鮮で、メキシコに根付いた文化を感じた11日間だった。本プログラムに参加するにあたって、私には目標が3つあった。それらと照らし合わせながら、今回の派遣の振り返りをしたい。

まず1つ目の目標は、福岡にルーツを持つ日系人の方々の歴史を深く学ぶことであった。本やインターネットだけでは知ることができない、歴史を学びたいと派遣が決まったころから決めていた。そこで、メキシコでは、日墨会館やあかね記念館を訪れ、言語も文化も全く異なる地で生活をするものの過酷さについて、展示物を通して実感した。そのときに、福岡県人会の方々からいただいた「サムライたちのメキシコ」という本の中でも、移住してきた、まだ何もわからない日本人がメキシコで生きていくと決心し、日本とは違う天候や知識不足に悩まされながらも、今のメキシコに住む日系人の生活の基盤を作ってきたその姿に感銘を受けた。それだけでなく、彼らはメキシコ革命で、自分たちの会社や家が暴徒に襲われても決して逃げることはなく、メキシコ政府が、メキシコ在住の外国人に対する損害賠償に応じなければいけない状況になったときでさえ、日系人は、メキシコの発展のためにあるこの革命で、日本人も現地のメキシコ人と同じ痛みを分かち合うべきだと主張し、損害賠償を請求しなかった。この話は、長らくメキシコ政府で語り継がれたらしく、戦時中でも、日本人だからと言って、暴力を振るわれることもなかったと、あかね記念館の春日さんが教えてくださった。日本から遠く離れたメキシコでも、日本人としての誇りを失わずに、信念を持って生涯を過ごされた日系人の方々のおかげで、今の日墨関係があると思うと、移住された日系人の方々への尊敬と感謝の気持ちでいっぱいになった。

2つ目の目標は、旅行では感じられないメキシコの文化や生活に触れることだった。本プログラムでは、ホームステイがあり、ホストファミリーと過ごす時間が多く設けられていた。ホストファミリーと食べる夕食は、いつも新しく知る料理ばかりで、今までメキシコ料理というと、タコスくらいしか思いつかなかった私が、メキシコでの生活を通して、ケサリージャ（朝食でよく出てくる料理）やノパル（サボテン）など、日本では食べられないような料理も数多く知ることができた。特に、私にとって新鮮だったことは、「家族との時間の過ごし方」だ。私の実家では、家族の帰宅する時間も寝る時間もバラバラなため、夕食は各自で食べることが多いが、私がホームステイでお世話になった日系3世のかれんさんがいる石井家のお宅では、夕食はできるだけ家族そろってから食べるようにされてい

た。食事の後も、かれんさんは、そのままダイニングで、その日にあったことを聞いてくださり、福岡に県費留学生として来ていたころの話や、メキシコの文化について、毎日たくさんお話をしてくださった。かれんさんと旦那さんのつよしさんは、20年ほど前に福岡に留学した時、日本で出会ったそうで、福岡のことについてもご存じだったので、地元の話で大変盛り上がった。家族と過ごす時間が多いのは、私自身久しぶりの出来事だったため、ホストファミリーとの生活はとても充実したものだ。また、家族との時間を確保するために、家事は、お手伝いさんを雇うようにし、休日は、健康のためにも子どもたちと一緒にテニスに行くそうだ。日本でお手伝いさんを雇うことは、あまりポピュラーではないが、家族との時間を確保するためだという石井さんの考えは、私が今まで持っていなかったもので、素敵なこだわりをお持ちだなと感じた。

そして最後の目標は、日本や福岡の魅力を再発見することであった。日墨会館の近くにある日墨協会日本語学校では、多くのメキシコの人々が、日本語や文化を学習していた。しかも、日系人は全体の10パーセントほどしかおらず、遠く離れたメキシコでも、日本に興味を持ってきていることを実感した。日本語学校では、ホストファミリーのかれんさんも働かれていて、日本の文化やことばを今も継承しようと努力されていた。また、メキシコにある国際交流基金では、日本語教師の育成にも力を入れており、そこには、メキシコ人も日本人も関係なく多くの人々が、日本語教育に奮励する姿があり、私自身も、もっと自分の国の文化を大切に、深く知っていくべきだと強く思わされた。だから、日本や福岡の魅力を再発見したというよりも、これからもっと福岡の魅力を見つけ、そのうえで発信していける存在になりたいと思えたプログラムになった。

今回、このプログラムを安全に、そして、充実したものにできたのは家守局長、堀さんをはじめとする福岡県国際交流センターのみなさんや福岡県人会のみなさん、私を家族のように受け入れてくれた石井ホストファミリーのみなさんのおかげである。福岡に戻った今、私はこの活動で知ったこと、学んだことを発信し、今年11月にある世界大会で精いっぱい恩返しをしようと思う。ここに関わってくださったすべての方への多大なる感謝の気持ちを表して私の報告書としたい。

日本人メキシコ移住あかね記念館（メキシコシティ）

2016年10月プレオープン。

先祖のおかげで今があることを若い世代につたえるために設立された。この資料館は、メキシコンの日本人移民に関する資料が展示されている。

日墨協会設立60周年記念事業の一環として、パンアメリカン日系人協会の春日カルロス名誉会長の多大なサポートにより実現した。

記念館の名前は、設立に尽力した春日さんの母親、光子さんの歌人としてのペンネーム「あかね」から付けられた。

3つの側面から学んだこと

ふるかわ たくま
古川 拓馬

(九州大学 経済学部経済・経営学科 2年)



2月23日に福岡空港で、職員の方や家族会の方に見送られて、成田空港で乗り換えをしつつ、15時間以上かけてメキシコへ向かった。メキシコシティ国際空港上空に差し掛かると、機内から見る外の景色は黄色みがかっていて、いよいよメキシコにたどり着くと実感した。メキシコに到着すると、県人会の方々が歓迎会を開いてくれた。日本語や英語で県人会の人たちと、日本についてや、メキシコについてなど様々な話をして、盛り上がった。その際にある人が、メキシコの駄菓子を買ってきてくれたが、それは日本の駄菓子のようにただ甘いのではなく、甘い下地に辛みがついていて、不思議な感覚であった。歓迎会の後は、ホームステイ先の平田会長の家へ向かった。家には、戦後実際に日本から移住された方であるパコさんのお母さんの政子さんがおられ、日本や自分のことについてや、政子さんの過去についてお話をした。

プログラムでは、県人会の方の職場を訪問したり、日本との関係がある機関を訪問したりした。まず日墨会館では、その中にある日本語学校で、移民の歴史などを学んだ。そして、その後は、日墨会館の隣にあるカルロス春日さんが作られたあかね記念館を訪問して、移民についての写真や文書などを見学した。ここで少し、メキシコの移民の歴史について伺ったお話を振り返ると、そもそも日本とメキシコの関係が始まったのは1609年のことだそうだ。当時千葉県沖でメキシコ船が難破し、それを地元の人が助けたそうだ。その後1614年には伊達政宗により、支倉常長使節団がメキシコへ派遣された。明治に入ってから、榎本植民団を先頭にメキシコへの移住が始まり、福岡県からは、戦前には全国4番目、戦後は全国3番目に多くの方がメキシコへ移住したそうだ。

日本大使館では、公使の方から日本とメキシコの関係や、メキシコの政治的状況についてなどを主にお話を伺った。中でも、防災や災害援助の面でも、日本とメキシコの関係が深いということは、知らなかったため、驚いたことであったが、確かに、メキシコでは1985年や2017年に大きな地震が発生し、日本と同様に地震の影響が大きいということを見ると、地理的には遠くても協力関係が必要であると改めて感じた。

国際交流基金では、中南米と日本の文化交流を目的に、映画上映などの文化芸術交流や日本人研究者招へい支援などの知的交流、中南米の日本語教師向けの日本語研修などの日本語教育を行っているそうだ。

福岡県人会の人が勤める医療系の専門学校 UNITEC には、実際の診療所もあるが、歯科の部門では、その中でも、さらにいくつかの部門に分かれているということは初めて知った。その後、同じく福岡県人会の人が勤める Century21 の事務所へ伺い、お話を聞いた。

ここでは女性の職員の方が多く、また学歴や言語レベルに関係なく働くことができるそうだ。そして、この事務所は、部屋の仕切りが透明なガラスで、開放的な空間であり、働きやすい環境づくりをしているということが感じられた。

プログラム後半に、メキシコシティから車で4時間ほどのグアナファト州へ行ったグアナファトにある自動車メーカーマツダの工場 Mazda de Mexico Vehicle Operation では、6000人以上の従業員が勤務しており、その多くは現地のメキシコ人である。実際に工場内も見学をさせてもらったが、働いている人はほとんどがメキシコ人であった。お話によると、マツダの進出により、全体的に20万人もの雇用を生み出したそうだ。その後に見学したグアナファト市内には、豪華な教会や建物が多いが、それは銀の産出が非常に多かったことに由来するそうだ。

グアナファト2日目は、まず、グアナファト州大学の語学学校へ行き、スペイン語の授業を受けたり、日本語を学んでいるメキシコ人との交流を行ったりした。日本文化に興味を持った理由を聞いてみると、アニメがきっかけということで、日本のアニメ文化の世界的な影響力の強さを感じた。その後は、かけはし日本メキシコ文化センターへ伺い、日本語を学ぶ方々と交流をした。日本に来たことがない人でも、日本の文化に非常に興味を持っていてくれたことは、日本人として非常に嬉しく感じた。

フリータイムでは、ホームステイ先の印刷所で働いている方の運転で、東京オリンピックの4年後1968年に行われたメキシコでのオリンピックに使われたスタジアムを見学させてもらった。そして、日本に帰る日には、県人会の人たちが送別会を開いてくださり、まだ話したことがなかった県人会の方と福岡のことや宗教観のことなどについてお話した。

以上、メキシコでの活動を振り返ったが、私はメキシコへ行く前に、国際的側面、文化・歴史的側面、経済的側面、3つの側面から目標を立てた。そこで、この3つの側面について、実際にメキシコで学んだり感じたりしたことを次に記述していく。

まず、国際的な側面についてだが、今回は県人会の人たちとの交流がメインだったこともあり、メキシコで触れあう人の多くは、日本に様々な形で関係がある人たちで、みなさんある程度日本のことを知っていた。しかし、その程度は人によって異なり、日本語を話すことができない人もいた。そのような中で、コミュニケーションをとるうえで大切なものを2つ感じた。まずは、写真や映像の活用である。現代はスマートフォンなどで簡単に写真などを表示できる。そこで、写真などを使って説明をすることで、より分かりやすく具体的に説明することができると感じた。また、ジェスチャーも、改めて非常にコミュニケーションの上では重要であると感じた。ホームステイ先でお世話になったカルロスさんは、スペイン語しか話せないが、彼は表情が豊かでいろいろなジェスチャーを交えて話してくれた。スペイン語が分からない自分には、言葉だけではわからないことも多かったが、ジェスチャーによって完璧にはないものの、コミュニケーションをとることができた。その際、ジェスチャーは、国によって多少異なるため、現地のジェスチャーを現地の人を見てまねることが必要であると感じた。例えば、お酒を飲むというジェスチャーは、日本では手を丸めてジョッキを持つポーズをするが、メキシコでは親指と小指を立てて飲むポーズをしていたため、お酒の話が出ると私もそのポーズをまねた。

次に、文化・歴史的な側面についてだが、移民についてさまざまなお話を伺い、新しい知識を得た。特に、私のホームステイ先の平田家の政子さんは、ご自身が移民した経験を持つため、そのお話は文献などからは得られないものであった。もともと、福岡の佐賀県に近いところで育った政子さんは、戦後、従兄弟がパラグアイに移住していて誘わ

れたこともあり、同じく家族とともにパラグアイへ移住して、その後メキシコへ引っ越し、今に至るようだ。しかし、なぜ育った日本を離れて異国の地で生活が続けることができたのか、初めてお話を聞いた時にそう思った。しかし、その後一緒に生活をしてお話をしていると少しずつその理由がわかってきた。まず、政子さんは非常に世界に興味を持っていた。お話を聞くと、今まで様々な国に旅行に出かけていて、海外にも友人がたくさんいらっしゃるようだ。さらに、現地のコミュニティになじむということも1つの理由であると感じた。メキシコでは、メキシコの友人たちと一緒に話をしたりすることが楽しく、またメキシコが好きであるとお話されたことがあった。そのように、世界に興味を持ち、生活する地を好きになり、現地になじむということが、移住した先で長い間生活をする事ができた理由の1つだと感じた。

最後に、経済的な側面についてだが、町中を見たり、大使館やマツダでお話を伺ったりしたことから様々なことを学んだ。まず、大使館やマツダで伺ったことから、日本とメキシコは経済的なつながりが改めて非常に強いと感じた。メキシコのグアナフアト州には多くの日系自動車メーカーが進出しており、マツダの方のお話によるとマツダ単独で6000人もの雇用をしているようだ。また、日本企業の進出は、自動車産業だけでなく、保険や銀行、また、総合商社もメキシコへ進出しており、中には、石油や風力プロジェクトに対して投資を行って、インフラ整備を行うこともしているようだ。メキシコへ行く前は、トランプ政権の保護主義的な政策により、USMCAの締結などメキシコの経済は打撃を受けていると思っていたが、実際にメキシコで話を聞いてみると、メキシコ政府が不利にならないようにアメリカと交渉していたり、アメリカへ工場を新設したり、また、メキシコには他にもFTA締結国が多くあるなどの理由もあり、大きな経済的影響を受けているとは感じなかった。現地でお話を聞いただけでなく、町中の見学や搭乗した飛行機からも、メキシコと日本のつながりを感じた。まず町中には、トヨタ、日産、マツダなど多くの日本車が走っていた。走っている車の半分以上は、日本車であったと感じた。しかし、なぜそんなに日本車が多いのか、お話を少し伺ったところ、メキシコでは、日本車が手ごろに購入できることがひとつの理由だそうだ。新車を購入することが多いメキシコでは、安く車を購入することが必要になるが、その際安く購入できる日本車、特に日産の車は魅力的であるようだ。また、私達が搭乗した飛行機も経済的な面から見ると興味深いことがあった。それは、ビジネスクラスの座席数の多さである。機内へ入るとビジネスクラスの座席が、機体の半分以上あった。今回登場した飛行機は、ANAのボーイング787型の飛行機で、ANAの同じ型の飛行機は、以前カナダへ行った際も搭乗した。しかし、その際は、ビジネスクラスの座席数は、より少なかった。このことから、他の国に比べて、メキシコは、ビジネス目的で行く人が多いということがわかり、日本とメキシコのビジネス面でのつながりの強さがわかる。

最後に、メキシコでは、文献だけでは知りえないことを現地に足を運ぶことで知ることができると感じた。移民の方々の気持ちの部分や、新聞で読んだ内容以上のことを実際にメキシコで知ることができ、改めて現地へ行くことの大切さを学んだ。様々な場で、最近日本人は海外へ行く機会が減っているというお話があり、実際、私自身も今まであまり海外に行く機会が多くなかった。しかし、このようなことを学んだこともあり、今後は積極的に海外へ足を運び、文献だけでは知りえないことを現地から学んでいきたいと思う。

メキシコ派遣プロジェクト報告書

～愛を感じた 10 日間～

うちぬの さとし
内布 智士

(福岡教育大学 初等教育教員養成課程 3年)



10日間のメキシコ青年派遣プログラムの一日一日は、とても充実しており、私にとって刺激的で、考えさせられた。そして、成長する機会を与えられた。

初日、メキシコシティへ着後、県人会の方々から歓迎会を開いていただいた。その後、ホームステイ先へ移動し、ホストマザーの政子さんから移民の話を聞かせていただいた。政子さんは、戦後パラグアイに小さい子どもを抱えながら移住、その後「いろいろな国に行ってみよう」そんな思いを抱きながらメキシコへと移住されたそう。とても楽しそうに話されている政子さんを見て、アクティブに、何事にも物おしせずに行動することの必要性を説かれたような気がした。

活動日前半に見学した国立博物館には、数多くの展示物があり、メキシコの地での紀元前の歴史は、とても長く文明を持っていたことを学習した。メキシコの歴史は、日本の歴史とは全く異なるもので、文明や遺跡は、日本ではあまりないものが多く、興味深かった。また、チャプルテペク城では、スペイン統治下でのメキシコ、革命中、革命後等のメキシコの壁画を展示、紹介していた。



また、日墨会館には日本語学校、日本庭園があり、地理的に日本の裏側に日本の文化である日本庭園があることに驚いた。そこには、あかね記念館があり、あかね記念館の中には日本人移民に関する史料が残されており、「サムライたちのメキシコ」に書かれていた内容の人物の写真や資料を見つけ、メキシコの地で、日本人が大変な努力をしていたことを知ることができた。あかね記念館の史料や「サムライたちのメキシコ」に書かれている人はほんの一部であって、本当は、もっと多くの人々がメキシコの地で生活をしている。ホームステイ先の政子さん、県人会の飯田さんもその中の一人であり、二人のいろいろな話を思い出しながら、あかね記念館を見学した。

日本大使館では、公使からメキシコの政治情勢大使館の説明をしていただいた。大使館は政府国民の利益、権利を保護することが大きな役目で、外交官が派遣されている。私は、国際協力や数多くの外交問題に携わっている公使に一つの質問を



した。「海外経験のない子どもたちに、どのように国際協力を伝えればよいか」。公使は「国とか国際ではなく、隣の村が困っていたら助けるのは当たり前のこと。それを伝えることが大切だと思う。」とおっしゃられた。私はそのように考えたことがなかったので驚いた。国が違えばどこか他人事のように感じてしまう。しかし、今回のプログラムにかかわってくれた人は、私のことを初めてみるのにホームステイをさせてくれて、案内をしてくれて、そのほかにもいろいろと親切にしてもらった。日系人、メキシコ人、日本人、すべての人が同じように人間で、国籍が違うだけである。それを公使からあらためて言われたように思えた。公使の言葉とプログラムで感じたことが繋がった。



国際交流基金事務所は、世界に事務所が26あり、文化芸術交流や日本語教育を行っている場所である。どのように文化を発信すれば、文化の交流ができるのかを教えていただいた。まず、日本語を学習しやすいようにオンラインでのシステムを作る。そして、アニメや漫画などのポップカルチャーを取り入れる。そして、一番に大切なことは、日本語でメキシコを表現させること。自分の国を紹介することで本当に日本語を使いたいと思わせる。これらの工夫を取り入れながら、日本語教育、文化芸術交流を推進されていた。

Century21の訪問した時は、初めて見るメキシコの職場がとても新鮮で、責任者の田中グアダルペさんからの「日本の礼儀だったり、思いやりだったり、尊重することで、業績を伸ばしている。」「従業員が初めて成功したときにうれしく思う。」という話に、従業員の方々が、真剣に耳を傾けていたことが、とても印象的でした。



バスに揺られて4時間近く移動し、グアナファト州サラマンカにあるマツダ自動車工場を訪問した。とても大きな工場で広大な土地に日本の会社のマツダがあった。社長の話によると、一万人の雇用を生んだこの工場はさまざまな取り組みをしている。例えば、108チームでサッカー大会を企画したり、人材育成のため日本での研修制度が組まれていたりなど企業として働きやすい工夫をしていることが分かった。工場内は大変広く、多くの従業員が働いており、日本人の技術者もいた。メキシコと日本がマツダを通して、つながっていることを実感した。

グアナファトは、鉱山地区でその鉱物の産出で栄えた地域で、教会の壁の色が産出された鉱物の淡い緑色で、建物、道の装飾等が石でできていて、とてもきれいな景観だった。

グアナファト大学では、日本人学生がいて、一人ひとりの言葉に感銘を受けた。新しく言語を学びたい。そう思った。「かけはし」言語学校では、メキシコの人が、一生懸命日本語で自己紹介をしてくれた。日本語を学んでいる理由は、日本で技術を学ぶため。ま

た、アニメや漫画が好きだから、日本の文化が好きだから、と様々であった。

フリータイムでは、朝はゆっくりで教会に行く人がいたり、コチョワカンでゆったりと時間が流れ、メキシコシティの渋滞で、メキシコの時間を感じた。最終日の送別会では、多くの人と話す機会があり、いろいろな話を聞いた。また、「君の魅力はここだよ。自信をもって」



「そういわれたのは初めてで、とてもうれしかった。そして、改めて自分を見つめなおすきっかけになった。そして、自分と同じようにプログラムを経験した仲間の心境を聞くことも初めてで、送別会は感動の連続だった。

今回のメキシコ派遣で、私は何を学んだのか振り返る。「サムライたちのメキシコ」という漫画では、榎本移民団が紹介されている。しかし、今回の派遣では、榎本移民団だけではなく日本から、多くの人々がメキシコに移住していることがわかった。その地に根を張り、生活を送っていて、そして、私たち派遣団を温かく迎え入れてくれた。おなかを壊したときは、暖かいアトーレ（黒砂糖を溶かしたものにトウモロコシの粉を入れたもの）を飲ませてくれ、言葉の通じない日本人でもいろいろなところに連れて行ってきて、最後にはまた「いつでも泊まりにおいで」と温かい言葉をかけてもらった。たくさんのお話や言葉で、多くのことを教えてくれた。遠いメキシコの地で出会えた、日系人の方々、メキシコ人、彼らは、今回の交流でいろいろなことに気付かせてくれるとともに、私自身がなすべきことを教えられたように感じる。今度は、私がもらった幸せを周りに返せるように研鑽を積みたい、そのように思えたプログラムだった。

今回のプログラムに関わってくれた方、出会った方、すべての人に感謝申し上げ、メキシコ派遣プログラムの報告書とする。



海を越えた日本人



きむらあきひさ

木村晃久

(九州大学 工学部地球環境工学科 3年)

1. 目的

メキシコの日系人の方々を訪ね、移民の歴史やフロンティア精神を学び、メキシコで交流し体験したことから、国際社会のなかで個人がどのように社会に関わり合いを持ち、何ができるのかを考える。そして、この派遣を通して国際社会で活躍し、日本に貢献できる人材に成長するためには、どうあるべきかを再確認する。

2. 所見

今回のメキシコ派遣で、自身がこれまで参加した留学や海外研修と大きくベクトルが違うこととして、海外に移り住んだ日系人の方々との交流や、メキシコで活躍する日系企業訪問したことが挙げられる。海外に住む日本人として世界を見つめ、日本を見つめている先人たちと意見交換したことは、自分自身の考え方に新たな引き出しを創ることになり、大変貴重な時間であった。そして私は大きく次の3つのことを学んだ。

- (1) 異文化理解と自国理解
 - (2) 日本人としての Identity
 - (3) 伝え繋げていくことの重要性
- の3点である。

(1) 異文化理解と自国理解

日本から約 11,000 km離れたメキシコという国をはっきりと想像することは難しく、期待と不安が混じった思いで迎えた研修であった。研修が始まってからは、多くのことに驚かされた。一番衝撃的であったのは食文化である。コオロギや芋虫の素揚げをスナック菓子感覚で食べることや、チョコレートをスパイスとしてみなして、日本人では考えつかないような組み合わせで食べていたことは、鮮明に覚えている。国が違えば食文化も違うのは当たり前のことであるが、1日3度の食事でもここまで驚かされるのは、メキシコが初めてだった。

次に、メキシコの雰囲気でもよいと感じたことは、人々のフレンドリーさである。ラテン系のお国柄ということもあり、特に店舗の接客などは、日本にはない温かさを感じることができた。その一方で、治安については深く考えさせられた。日本では街中で歩きスマホや、荷物を放置してその場を離れるなどといった行為を無意識

に行っている中、メキシコでは現地の人々であれ、そのような行為をみかけることは少なかった。また、公共交通機関を利用するといった行為は、犯罪リスクを伴うことを伺い、現地の人々が、日常生活の中で、危機感をもって生活していることがわかった。自分たち日本人が、安全で平和な生活を日々当たり前を送れていることに感謝すると同時に、平和慣れして「世界の認識」を見誤っているとも少し痛感した。

このようにメキシコのスタンダードに触れ、異文化を理解し、メキシコのよさを見つけることは、同時に自分たちが住む福岡（日本）のよさを発見することができたとも感じる。

私たちが異文化体験を行うことは、異文化を尊重し、理解するのに重要である。そのうえ日本・福岡について再考し、個々がシビックプライドの醸成をすることで、私たちは、日々の生活をより豊かにできると感じた。

(2) 日本人としての Identity

メキシコの滞在中、「グアナファト大学」・「国際交流基金」や「かけはし」などと交流する中で、メキシコの方々に、日本や日本人が愛されていると思う場面に幾度も遭遇した。日本の文化に興味を持つ人々との交流を主に行ったので、一概にメキシコ人に日本の文化・日本人の国民性や考え方などが受け入れられているとはいえないが、数ある国の中で、ハッキリとよい存在感を示していることは事実である。

これは、県人会を初めとする日系人方が、日本人がメキシコでまだ知られていなかった時代から現在までの百数十年の間で、日本人としての誇りや気質・礼儀正しさをしっかりと受け継ぎ、メキシコのコミュニティに広げ浸透させ培ってきた努力の賜物であると強く感じた。私は、この受け継がれてきた思いや気質を日本人の「Identity」と考えている。

日本で生活していると、自分自身が日本人としての「Identity」であることを意識することはないが、海外や多民族が生活する国では、自分自身の「Identity」を強く考えさせられる。今回、海外で生活してきた日本人たちと長く接する機会をいただいたからこそ、はじめて「Identity」について深く考えることができたと思う。

今後の国際社会で日本人として活躍するために、先人たちのこの「Identity」を受け継ぎ、自分たちの「Identity」にしっかりと活用することが大切であると感じた。

(3) 伝え繋げていくことの重要性

今回経験したことを伝え、次の学生に繋げることは、派遣された者の一番重要な責務であると感じた。周囲の人々に自分自身の体験を話し、その国や事柄について興味関心を持ってもらう。意識を広めていくことでバトンが繋がり、より行動の輪が広がると思う。

日本大使館訪問時に公使にもお話しいただいたが、国家間の諸問題の解決や条約を締結するのは政府である。しかし、その後の二国間の関係を強く結びつけるのは国民の声である。この世論を形成するために、民間レベルでの交流や協力を盛んに行うことが重要になってくる。

だからこそ、伝えつなぐことが民間外交の礎になり、自分にできる最初の小さな

一歩であると考えている。日本とメキシコの距離はまだまだ遠いが、日本とメキシコの人々の心を近づけることができるような活動を行っていきたいと思う。

最後に、私は自身の専門性を生かしたグローバルエンジニアとして活躍したい。工業技術の分野でリーダーシップをとり、民間外交の輪を積極的に広めていくことで国際社会、日本そして福岡に貢献したいと考えている。

3. 謝辞

今回学生だけではできない交流を企画し、引率してくださいました家守局長・堀様をはじめとする福岡県国際交流センターの皆様、移民の貴重なお話をしてくださいました飯田前会長をはじめとするメキシコ福岡県人会の皆様、私たちを温かく受け入れてくださったホストファミリー・田中家の皆様、現地で交流のあった皆さまに心より感謝いたします。

本当にありがとうございました。

国際交流基金メキシコ日本文化センター（メキシコシティ）

1987年8月開設。

日本語専門家による中南米各地域で日本語教師への研修の実施、オンライン日本語教育「みなと」の活用など、日本語教育支援を行っている。

その他、中南米と日本の文化交流を目的に映画上映を行ったりする文化芸術交流、また、環境や高齢化などの共通課題を共有し、課題解決に向けて知的交流を行っている。

メキシコ内に進出している日系企業の駐在員家族と、日本文化や日本語学習に関心のあるメキシコの人々との交流の場として、図書館も開設している。

温かい国、メキシコ

なかその こうたろう
中園 康太郎

(西南学院大学 法学部法律学科 2年)



「現地でしか学べないことを持ち帰り、貴重な経験を自分のものにする。」これは、私が、メキシコに行く前に掲げた自分の中での目標です。このプログラムを通して、私は、その場に行かなければわからない、先入観だけにとらわれず、自分の目で確かめることの大切さを改めて知ることができました。その中でも一番印象に残ったのは、現地の方々の国民性です。

温かさに触れる機会は多くありました。私たちはメキシコで9日間、福岡県人会の方々の家にホームステイをさせて頂きました。スペイン語も英語も堪能でなく、少し迷惑をかけてしまうかもしれないという気持ちでいましたが、ホストファミリーの方々は温かく迎えてくれ、楽しく、充実した毎日を過ごすことができました。

移民を学ぶ中でも、温かさを感じることもありました。プログラムの中で、移民の歴史を学ぶため、あかね記念館という、日本移住者の歴史を学ぶことのできる歴史館を訪れました。日本(福岡)からメキシコへ移住した理由はいくつもありました。叔父に呼ばれたから、第二次世界大戦から逃げるため、窮屈な日本から抜け出すため、理由は様々でした。そんな日本人に対して、メキシコの方々はどのような対応をしたのか、日本人はどのような待遇を受けたのか、私はメキシコへ行く前から疑問に思っていました。その当時、南米などに移住した日本人は「朝から晩まで奴隷のように扱われ、迫害を受けていた」という話を授業などで聞いていたからです。私はメキシコ移住の場合も、そうとばかり思っていました。しかし、記念館の方に聞くと、そのような歴史はなく、むしろ、メキシコの方々は昔から移民に対して寛容で、日本人と協力しながら暮らしていた、という話でした。

これら2つを経験した時に、日本大使館で聞いたメキシコ人の特徴のお話を思い出しました。「メキシコ人は、ラテンアメリカの中でも陽気で、礼儀正しく、そして、何かと気にする性格である、つまり、人の気持ちを考え相手を悲しませたくない性格である。」

私はメキシコに行く前まで、この国に対し、治安やニュースで報道されている問題から、あまり良い印象はありませんでした。しかし、この実体験から、印象は大きく変わり、良いものとなり、現地に行かなければわからないこと、身をもって体験しなければ、現地の方々の話を聞かなければわからないことの重要性を、改めて認識することができました。

また、メキシコには、日本のことを学びたいという方が多くいました。アニメ・マンガなどのポップカルチャーから入り、将来日本に行ってみたくため、日本語を学びたいという人や、メキシコに進出した日本の自動車産業の会社で働きたいため、日本の会社のことを勉強し、就職したいという人、日本とメキシコの懸け橋となるため、将来日本で通訳の

仕事をしたいという人、いろいろな方がいましたが、共通して言えたのは、その夢に対して、日本を目指して真面目に取り組んでいる、ということでした。

このことから、メキシコの反対側にある国にもかかわらず、こんなにも日本に興味を持ってきていることへの嬉しさ、そして、ひたむきに自分の目標に向かって真面目に取り組むことのできる、メキシコの方の国民性を学ぶことができました。

ルーツがある、また、その国が好きである、それだけでその人に対して親切にすること愛をもって接することは難しいはず。また、自分の夢に向かってひたむきに、ただ目標だけを見て、物事に対し、真面目に取り組むことは難しいはず。しかし、メキシコの方の「陽気で、礼儀正しく、人の気持ちを考え相手を悲しませたくない、勤勉な」国民性のおかげで、私はその大切さに気付くことができました。この経験を通して、これから生きていくうえで最も重要なことを学ぶことができた気がしました。

また、この機会に、現在のメキシコの移民問題について、1人の日系メキシコ人の方に質問しました。私は、「移民キャラバンの問題から、中南米の方から来ている移民に対して、あなたは恐怖を感じることはないのか」と質問をしました。すると、その方は「それはない。自分たちの祖先が移民に寛容だったように、私たちもそうでなければならない。また、私も日系人として後ろ指を指された経験がある。そのため、そういうことをするわけにはいかない。その人たちは色々な問題があってここに来ている。それを冷たくあしらうのではなく、温かく迎えるのが私たちである。」と答えました。

先日、福岡は7年連続で外国人入国者が増え、300万人を超えたというニュースを目にしました。福岡では今年、2019ラグビーワールドカップもあり、また、日本全体に目を向けると、2020年東京オリンピックが開催され、多くの外国人観光客、そして、多くの外国人移住者が来ることでしょう。様々なお店で様々な国籍の方が働く、いわゆる外国人労働者が増え続けるでしょう。そのような状況になった場合、私は、この経験を踏まえその方たちに対し、気持ちを考え、温かく迎えらるような、グローバルな視点を持って行動していきたいと思いました。

余裕のある考えを身につけることのできた11日間でした。

日墨交流を通じて学んだ、 現地の暮らしに生き続ける文化と人々の 想い

さだまつ さつき

貞松 咲月

(九州大学 農学部生物資源環境学科 2年)



【はじめに】

私は、平成 30 年度の福岡県人会青年派遣プログラムの参加学生として、2019 年 2 月 23 日から 3 月 5 日までの 10 日間、メキシコでの現地研修を行いました。参加学生は、大学 1 年生から 3 年生の計 10 名でした。今回の研修で初めて知り合った人がほとんどでしたが、研修を終えて、1 ヶ月前に初めて会ったとは思えないほど、学生同士での学び合いやチームの団結力を得ることができました。今回企画から運営、研修中のサポートに全力で関わっていただいた福岡県国際交流センターの方々と福岡県人会の皆様はじめ、関わっていただいた全ての方々に感謝の意を表したいと思います。

【研修プログラム】

メキシコを訪れるのは今回が初めてで、ホームステイ中の生活や現地で暮らす人がどのような考えをしているのか、不安もありつつも期待の方が大きく、楽しみな気持ちでいっぱいでした。成田—メキシコ間は、ANA の最長距離のフライトとのことでした。しかし、そのフライトもあつという間に感じたほど、他のメンバーと色々な話をして、始終楽しみました。

メキシコに着いた時、とても暑くて熱気が強くて、やっと着いたなという実感を持つことができました。街に出ると、メキシコの空気を感じ、一瞬でこの街が好きになりました。県人会のオリエンテーションの会場の広い部屋には、色々な料理が準備されていて、「ようこそメキシコへ！」の大きなポスターがあり、県人会の皆さんが温かく迎えてくださいました。私のホームステイ先は、福岡県人会前会長の飯田さんの娘さんのお宅で、飯田みちこさん、寺田アルベルトさん、ひできさん、あいりさん、としおさんの 5 人家族でした。あいりさんは、現在東京医科歯科大で勉強中のため日本におり、次男のとしおさんは 4 月から県費留学生として福岡に 1 年間来るということで、たくさん話をしました。話をしている、家族や知り合いをととても大切にすることだということがよくわかりました。1 日目の夜は、家族で夕食を食べに外出して、チチャロンというチーズをこんがり焼いてのばした料理や、タコスにいろいろなソースをかけて食べて、メキシカン料理を堪能しました。見た目ではわからない辛いソースにはとても驚きましたが、本場の料理は物凄く美味しく、メキシコの食文化をもっと知りたいと思いました。

国立博物館では、壁画運動の頃の美術が素晴らしく、どの絵も迫力があって、大きくて、カラフルで、当時の政治の状況や伝えたいメッセージがありありと伝わってくるものでし

た。特に、宗教や政治問題で人々が困窮していた時代の絵は、とても印象的でした。植民地時代の名残で、ヨーロッパ風の建築物や衣装が多くありました。博物館にあった生贄の骨や建築、そのストーリーなど、信じられないほど凄まじいものがありました。独特なものも多く、面白いと感じました。博物館には、観光客の他にも子どもたちがたくさんいましたが、メキシコでは、現地の人々は、無料でこのような施設を使うことができるような制度があるため、子どもや学生が、調べ学習で、よく博物館や美術館にきているとのことでした。メキシコは、古代マヤ文明などにも代表されるように、歴史的に重要な遺跡がたくさんあります。ガイドさんから歴史や遺跡について詳しく説明していただいて、教科書などに載っている以上に、深く知ることができました。メキシコの硬貨にもデザインされている、本物の「太陽の石」も見ることができ、感動しました。

ティオティアカンには、古代の有名なピラミッドで、月のピラミッドと太陽のピラミッドの2つに登ることができました。250段の急階段を登りきった頂上からは、遺跡が一望できて、青空との景色が最高に良かったです。メキシコの標高は高いので、行く前は慣れるまで大変なのではないか、とも思っていました。普段の生活では感じることはなかったのですが、さすがにこの遺跡を登っていた時は、きつく感じました。よく本などに載っているものを自分の目で見て、本の中に入り込んだような感覚になったのを覚えています。スーパーマーケットで驚いたのは、どんな商品も日本の5倍くらいあるのではないかなと思うくらい、全てビッグサイズだったことと、フルーツや野菜の種類がとても多くて、これまでに見たことのなかった、果物なのか野菜なのかよくわからない食べ物が増えたことです。また、メキシコではレモンというのですが、日本でいうライムをあらゆる料理に大量に使用するのですが、スーパーではキロ単位で売られていて、自分で大きなお皿にたくさんのライムを入れて、売り場に置いてある大きな測りに乗せて買うスタイルが新鮮で面白かったです。

日墨会館には、素敵な日本庭園があって、まるでメキシコにいることを忘れてしまいそうになるくらい、立派に日本が再現されていました。日本人の心を思い出させてくれる場所でした。これまで日本からメキシコに渡って、この地で亡くなった日本人の方々の名前が書いてある石碑を見て、こんなにも多くの先人たちの努力があったのだと改めて感じました。今まで、「日系人」として有名になっていた方を意識したことはほとんどありませんでしたが、県人会の方々のプレゼンを聞いて、日系人のこれまでの功績を初めて知りました。あかね記念館とは、最初の移民の記録をたくさん残されている場所で、当時、メキシコに渡ってきた人たちが、日本に向けて、その現状を綴った手紙などを読むと、とても大変な思いをしながら必死に生きていたことがわかりました。現在、世界中の日系人は300万人ほどいるそうですが、その半分はブラジル、40%ほどがアメリカで、メキシコは僅か0.5%なのだという事実には、とても驚きました。県人会の方から、移民に関する本もいただいたので、今後もしっかり学ぼうと思いました。

メキシコでよく見かける光景なのですが、車で信号待ちをしている時に、横断歩道でパフォーマンスをして、チップをもらう人たちがいました。顔をお面のようにはくして、いる人もいれば、子どもを抱えたまま車と車の間を歩くお母さんもいました。道を歩けば座り込んでお金をねだる人もいるのが当たり前な環境で、私のいる場所は、素晴らしく守られている環境であることを思い知らされる瞬間でした。その後、県会の方に、メキシコの社会保障について尋ねたところ、本当に貧しい人々を全面的に支える保障制度は存

在せず、未だに人種や生まれ育った環境で、就職や仕事のランクに差があるのだといいません。貧富の差を実感する場面でもありました。

国際交流基金では、直接日本語の教室を開いているのではなく、日本語の教師を育成するためのサポートを行っていました。中南米では、メキシコとブラジルのみ設立しているとのことでした。ここでは、3つの分野 ①文化・芸術交流 ②日本研究・知的研究 ③日本語教育を行っています。私が一番印象深かったのは、語学を学び、通訳者になる時に、「言語だけでなく、文化の通訳をする」というものでした。日本語学習者はここ数年で急激にその人数が伸びているようですが、それに伴う教師の数が足りていない現状があるようでした。日本でも、国内にとどまらずに世界に出て行く日本語教師が少ないということも知りました。私はこのとき、つい3ヶ月前に大学のタンデムプログラムで、バングラデシュ人に日本語を教えていた頃のことを思い出しました。このとき初めて、他国から来ている人に日本語を教えるということの難しさを知ったと同時に、そうした言語のサポートについて知りたいと思っていました。わざわざ国を出て、日本語を教えようとする環境がなかなか整っていないのは、現在の言語に対する需要・必要性が、まだまだ理解されていないことも一因のように思いました。今後、もしボランティアでも、インターンでも、日本語を教える、ということのサポートができることがあれば、視野に入れてみようという考えを持ちました。

Century21 で事務所の方がたくさんの質問に答えてくださったのですが、私が一番印象に残っているのは、事務所の方が一番やりがいを感じるということについて話して下さっていた時、「自分のチームメンバーが仕事を一生懸命やって、自分に自信をもって、その後も社会で活躍できることが一番嬉しいことだ」と、とても嬉しそうに話していたことでした。社会に対する強い責任感を持って仕事をし、その後の人生に大きく寄与し、プラスになることを経験できるようにサポートしている職場の雰囲気がとても素晴らしいと思えました。Century21 から賞も受賞しており、その秘訣は、仕事に対する情熱と向上心があるからだ実感しました。

6日目は、朝 5:30 から家を出発し、バスに乗り込んで、約4時間かけてグアナファトへ向かいました。グアナファトへ向かう道は、メキシコシティでは見られなかった、砂漠のような大地が広く、遠くまで広がっていて、これが思い描いていたメキシコだったと思うような感じがしました。遠く続く砂漠から朝日が昇る瞬間を見ることができて感動しました。

マツダ自動車工場に到着すると、壮大な大地に新しく大きな工場が見えました。そこで、マツダのメキシコ拠点の社長と副社長からお話をもらった後、工場見学で案内をしていただきました。日系企業の内部をよく見たことがなかったので、現地の方の働き方や制度について学べたことがとてもよかったです。現地の方が、「日本の会社で働きたい。」「マツダで働くお母さんやお父さんに憧れる。」「日本の会社で働いて、誇りを持てる。自信になる。」と思える企業にしたい、という思いを持って、自動車を生産することだけにとどまらず、地元で社員も一般市民も一緒にイベントをしたり、マラソンをしたりと企画を行うなど、地道な努力も素晴らしいと思えました。現地の方の働き方や文化・考え方に会社のやり方を合わせていくのは大変で、想定する以上に時間がかかるようでしたが、今後女性の働き方に力を入れていくということも仰っていました。私は工場内を見学してい

て、女性の割合がかなり高いような印象を受けていたのですが、実際のところ、部署によっては、エンジンなどの軽い負担ですむ作業は、50%以上も女性のところもあるということが衝撃的でした。日本の職場の環境からすると予想外でした。それでも、出産や子育てで続けられずに一年前後で辞めてしまう従業員が多いことも事実のようでした。今後、日系企業が努力を重ねて、その国の人々を幸せにできる企業であり続けられたらと思いました。

グアナファト市内に到着してからは、石畳の丘の上にカラフルな建物が立ち並び、夜はグアナファトの夜景を一望できて、とてもよかったです。グアナファトでは、昔大量にミイラが発掘された場所でもあって、ミイラの博物館やミイラがデザインされたものがたくさんありました。世界には、見たこともない感動する光景が、まだまだたくさんあることを実感しました。人生において、このような心揺さぶられる体験を沢山して、仲間を作って、それを次の世代に伝えられるようになりたいと心から思いました。

翌日の朝、ホテルからグアナファトの素晴らしい景色を堪能し、午前中はグアナファト州大学へ向かいました。もともとは修道院だった建物だったとのことで、とても古くて歴史のある、素晴らしい建物でした。私は、スペイン語のクラスを見学させてもらい、その後、日本語を勉強しているメキシコ人との交流もしました。スペイン語は、ハイレベルなクラスだったために、通訳の方に内容を教えてもらいながら見学しましたが、10人ほどのクラスで、日本人が3人いました。スペイン語をもっと勉強して、将来学びたいことに生かしたいと思って、メキシコで生活しながら、このスペイン語クラスに通っているとのことでした。日本語のクラスは、本当に熱心に日本語を習得しようとしていた姿が印象的で、レベルの差はありつつも、いろいろな方法で語学を学ぶように努力していたのが素晴らしいと感じました。特に、まだ1ヶ月しか日本語を勉強していないけれど、日本人の友人とコミュニケーションをとって日本語を覚えた、という子は、今の日本の若者が使う言葉も色々知っていて驚きました。言語を習得する近道は、やはりネイティブスピーカーと沢山コミュニケーションをとることだと実感しました。日本語を勉強するきっかけは、やはりアニメや漫画の影響が大きかったです。世界でジャパニーズカルチャーと呼ばれて人気ですが、本当に多くの若者が刺激を受けていることがよくわかりました。そのような姿を見て、日本にはもっと興味を持ってもらいたいし、私も他国の人に日本の魅力を伝えられるように発信していくことが大事だと感じました。

日本語学校の「かけはし」では、日本人の方が知り合いのメキシコ人に日本語を教えたことから始まった日本語学校で、メキシコ人の先生も数名いて、生徒さんは皆さん楽しんで日本語を学んでいました。言語を習得するのはなんだか敷居が高いような気がすることもありますが、実はそのようなことはなくて、言語を学んでいく過程で、その国の色々な文化を知って、様々な人々と知り合うことができるため、世界を広げるきっかけにできることを感じました。ここで知り合った学生さんとは、今でも連絡を取り合っていて、お互いの言語を学び合っているくらいとても仲良くなりました。

フリータイムの日は、他の県人会のお家と合流して一緒に過ごしました。ソチミルコでは、カラフルな船に乗って、川を渡って近くを散策しました。途中でマリアッチ（音楽隊）も一緒に船に乗って演奏をしてくれました。メキシコは、伝統的なカラフルな建物や衣装がとても素敵だと思いました。ソチミルコでは、誕生日などのお祝い事の時に、船にご馳

走やお酒やデザートを持ち寄って、大勢で乗るのが現地の人の楽しみ方のように思いました。近くのフラワーマーケットでは、サボテンの専門店が立ち並んでいたりと、メキシコならではの花屋さんもありとても楽しかったです。いろいろな種類のサボテンや花があったのですが、日本に比べると、とても安く売られていて驚きました。花瓶や植木鉢も可愛らしく飾られていて、フラワーマーケットはとても賑わっていました。

また、メキシコではテキーラの飲み方も色々あって勉強になりました。特に、ライムと塩で飲んだり、トマトソースと飲んだり、ビールと飲んだりしました。料理の楽しみ方も様々で、とても楽しい思い出となりました。もう辛い料理には大分慣れたつもりでしたが、見た目ではわからない辛い料理には苦労しました。デザートに、道で売っていたチュロスも試してみましたが、とても美味しかったです。

広場には壮大な教会があり、道ではピエロがいたり、物売りがいたりして、色々な生活、時間、人々が混ざり合うこのような日常が、メキシコなのだと感じる瞬間でした。日本では感じる事のない、この独特な雰囲気ますますメキシコのことを好きになりました。また、メキシコのマクドナルドでは、どこに行っても追加の辛いソースが沢山置いてあるのは面白かったです。

送別会は、始まってすぐ、涙が止まりませんでした。県人会に関わる家族が大勢集まって、広い会場がいっぱいになっていました。お別れの言葉を一人ずつ語って、感謝の気持ちを伝えましたが、私は胸がいっぱいで、沢山話したいことがありましたが、全ては言い尽くせませんでした。それでも、ホームステイ先のお母さんも涙して聞いてくれて、メキシコにきて学ぶことができ本当に良かったと思いました。メキシコに行くことを決めた時、メキシコのイメージって、なんだか治安もあまりよくなくて、怖いマイナスのイメージを持っていたのですが、この 10 日間で出会った人を振り返って、印象がガラッと変わりました。家族や仲間、関わる人とのコミュニケーションを本当に大事にして、自分たちの文化や生き方に自信を持って、若者たちに伝えていこうとする力強い精神を持ち、大変な努力家だったことを知りました。この国の人々を好きになったし、今まではるか遠くの国でしかなかったメキシコが、ずっと近くなって家族の一員のような存在になりました。私は、国際的な仕事に就きたいと思いつけてきたけれど、メキシコへ来て、その思いがより強くなったと同時に、関わる人たちに愛を持って、小さな関わりから広げて、世界中に大きな家族を作っていきたいと思いました。

【総括】

このプログラムで集まった 10 人のメンバーは、知り合って間もないけれど、素晴らしい仲間だったし、濃い時間を共に過ごして団結することができました。そして、みんな助け合って、思いやりのある優しい人たちで、この仲間に出会えたことは本当にかげがえのないことでした。帰りも 14 時間のフライトだったのですが、ほぼ半分以上は一緒に座っていたメンバーと語っていたほど、最後まで、とてもいい時間を過ごすことができました。これまで色々な国に行ったけれど、ここまで現地の生活にハラハラドキドキしながら、仲間に刺激されながら過ごした日々は、とても新鮮でした。どれも、全て関わってくださった方々が大変尽力してくださった結果であると思います。このプログラムでお世話になった方々には、いつか必ず恩返しをしたいと思いました。県人会の方々の温かい心、家族のように接してくれたメンバー、こんなにも愛に溢れた人たちがいるのかと思うほど、素敵

な人々に出会えたことに心から感謝したいと思います。

もう一つ、このプログラムで色々な方からお話を聞いて、日本人として世界に誇れる精神や、日本人としてのあり方や自信といったものを改めて考えました。メキシコでは、ここ数年で日系企業の進出に伴って、日本語を勉強する学生が増えたようですが、現地の人々が日本に抱く印象や期待は、私がかつて感じていたことよりもはるかに高く、これまで長い時間をかけて築いてきた日本の世界からの信頼を、これから私たちが受け継ぎ、発展させていきたいと考えました。

10 日間のプログラムは終了しましたが、出会った仲間とはこれからもまた会いたいと思いましたが、11 月、県人会の世界大会が福岡で行われる時、メキシコでお世話になった県人会のファミリーたちと再会したいと思います。今回、初めて世界の県人会の存在を実感しましたが、他国の県人会や日本にまつわる団体や企業、組織とも良い関係を築いて、世界をもっと広げていきたいと思いました。関わってくださった全ての方々に感謝して、これからの原動力にしていこうと思います。本当にありがとうございました。

写真アルバム

平成31年2月23日(土)
メキシコ福岡県人会による歓迎会



ホストファミリーとの対面



県人会のみなさんと

平成31年2月24日(日)
メキシコの歴史・社会・経済・文化・宗教の学習



チャプルテペク公園内国立人類学博物館
太陽の石「アステカカレンダー」



日本語ガイドの鯉江さんからの、人類
の始まりに関する、とても詳しい説明

平成31年2月25日(月)
メキシコの歴史・社会・経済・文化・宗教の学習

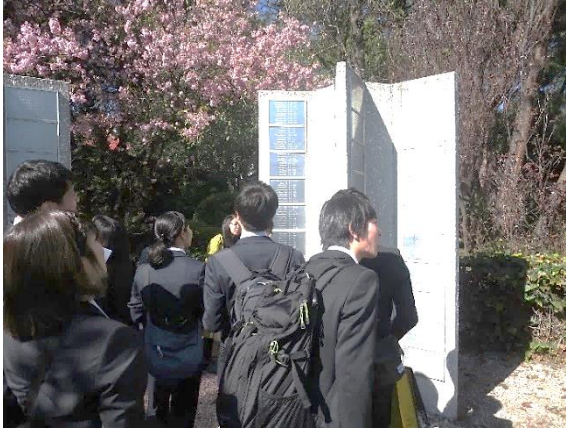


テオティウアカンピラミッド見学



グアダルーペ寺院見学

平成31年2月26日（火）
メキシコ移住者の歴史の学習、日本大使館訪問



日墨会館内日系移民記念塔見学



日系一世飯田氏（県人会前会長）と
日墨会館にて



日墨協会日本語学校でいただいた
「サムライたちのメキシコ」の本を
手に記念撮影



日墨協会日本語学校校長から
あかね記念館の設立経緯のお話



あかね記念館訪問にて
移民の歴史に関する資料を見る



日本大使館にて
（最後列左から3番目 桑名公使）

平成31年2月27日(水)
国際交流基金訪問、県人会会員の職場訪問



国際交流基金
メキシコ日本文化センター
図書館内(中央:杉本所長)



UNITEC 専門学校訪問
(左端 県人会会員
谷川グアダルーペ歯学部長)



UNITEC 専門学校で
実習室の見学



UNITEC 専門学校内を説明する
谷川氏



Century21 不動産事務所
(左端 県人会会員
田中グアダルーペ所長)



Century21 不動産事務所の
みなさんと

平成31年2月28日（木）
グアナファト州日系企業訪問、グアナファト市内見学



マツダ自動車工場訪問
(奥中央 水谷社長と森藤副社長)



マツダ自動車工場視察



グアナファト市内散策



グアナファト市内散策



グアナファト市内散策中に
マリアッチの演奏を聴く



グアナファト市の夜景

平成31年3月1日(金)
グアナファト州大学訪問、日本語学校訪問



グアナファト大学(グアナファト市内)
スペイン語文法授業



グアナファト大学
語学学習コーナー



グアナファト大学
日本語クラス学生との交流



グアナファト大学
日本語クラスのみなさんと



日本メキシコ文化センターかけはし
日本語教室の生徒との交流



日本メキシコ文化センターかけはし
のみなさんと(右端 池松代表)

平成31年3月2日(土)
フリータイム(各ホストファミリーと)



ソチミルコのトラヒネラ(ポート)



魔法の町テポツォトラン



コヨアカンの美術館にて



コヨアカンのショッピングモールにて



ホストファミリーと最後の食事



コヨアカンの布市場にて

平成31年3月3日（日）
県人会主催送別会



県人会のみなさんと博多どんたく踊りを一緒に



プログラムを終えて感想を発表



ホストファミリーの子どもたちと



派遣者と過去事業参加者と一緒に



送別会で初めて会う県人会会員の自己紹介



派遣者が県人会のみなさんへマリアッチ風の演奏披露